

人生の創造

一心の豊かさを求めて一

清 水 宏 子

1. はじめに

今から約2年前の国際青年年のある一日、NHKの企画によって国際的な「若者の集い」がスタジオで催され、TVを通して日本中に放映された。日本に滞在中の世界数十カ国からの若者が参集しての話し合いの場には、政治家とはまた異なる、小さな慎ましい平和を望んでいる一般民衆の声があった。諸外国の若者が発言して「我らはみんな同じ地球人、世界中の人が皆ひとつになれるように国境のない世界が生まれたらよいのに……」としんみりと話し合い満場の拍手を浴びていた時、ひとりの日本人代表の若者が手を挙げた。その発言は「自分はバイクで世界旅行をしたことがあるが、国境にぶつかる度にそこにとまらなければならず非常に不便した。国境はないほうがよい。」というのであった。この放送を聞いていた私はこの言葉に少なからず失望したのを覚えている。勿論満場の拍手は立ち消えになった。これはある有名大学の学生の発言であったのであるが、その専門の学力においては優秀な学生かもしれないが何か人として大切なものに欠けている。これが日本人代表として一般の聴取者に与えた印象ではないであろうか。

ひとつの国の代表の発言としてはあまりにも思想も内容もない浅薄さであった。しかし正直に振り返ってみると、この浅薄さは日本人の若者ばかりか、大人をも含めてその大半に見られる傾向ではないかと考えさせられたのである。何か日本人の現代的社会的な生活環境の中に、思想のない考えない人間を作りあげてしまう要素があるのではないであろうか。教育制度にしても社会組織にしても、もし日本の今の時代の波にのって生きてゆこうとしたら、現実に見られるように、人々はただじゃにむに勉強するか働くかするより道はない。周囲を見回す間もなく、考える間もなく、結局、自分の人生を自ら歩むのではなく社会の成り行きに押されて止むを得ず歩かされている、これが日本の社会人の大勢であるの感がせざるを得ない。日課として、定刻の込み合う通勤電車にのるために朝早く起床し朝食をかき込み、たまに乗り遅れてはそれによっていら立たされ周囲に八つ当たりせざるを得ない人もある。将来有名な会社に入るためにあらゆる若い時代の趣味興味を犠牲にして、ひたすらあまり自分の好きでもない知識の蓄積に努めざるを得ない少年もある。マスコミその他による情報の注入が多く考えるゆとりのない今の日本では、大人も子供も含めて、よく考えない人間が増えているのではないであろうか。そしてこれは世界の未来を背負う筈の若者にとっては重大な問題である。

今日本人は、これからの国際社会に、国際人として世界中の人々と肩を並べ手を取り合っ
て新しい世界を築いてゆくために貢献してゆかねばならない時に至っている。その時に最も
必要なのは、深い思想に支えられた豊かな温かい個性とたくましい創造力である。知らない
間に狭い自分の中に閉じこもり自己中心になることなく、また単に周囲の成り行きに振り回
されて受け身でだけ人生を歩むのではなく、自分を含めた世界の為によりよいものを生み出
してゆこうとする豊かな創造性、これこそ今の日本人に必要とされていることではないであ
らうか。豊かな世界は、豊かなひとりひとりの努力によってもたらされるからである。

2. 人間と創造

創造とはごく一般的にいえば、いかなるものであれ、あるものを造り出すことであるが、
狭い意味では、自身では存在するに不十分なものが完全な存在を与えられる場合、もしくは
虚無から物質が造り出された場合をいう⁽¹⁾。後者は第一の創造とも言われ、勿論神にのみ帰す
ことのできる業であるが、前者は第二の創造と言われこの世の継続的創造をさす。人間に
は人間としての創造力があるが、それはあくまでも第二の創造であることは言うまでもな
い。しかしその人間の創造力が現代の高度科学技術社会を築きあげた。絶えざる進歩発展を
遂げる人間社会の奥に垣間見られる、まだ限りを知らない人間の豊かな創造性である。

しかし現代の日本人は他の物の作成に力を入れ過ぎてきた結果、肝心の人間自身の人生の
創造にその能力を費やすことを怠ってきたといえるのではないであろうか。その一例とし
て、現在日本には世界で一番自殺が多いことがあげられる。特に心にかかるのは、子供の自
殺が増えていることである⁽²⁾。自然的には子供は最も生命力のある時代にいる筈であるのに、
何故その力を失ったのであろうか。物質的に豊かな日本人におこるこの悲劇は、人を生かす
のは物質ではないということをあからさまに示していると言えるのではないであろうか。

犬養道子女史は『人間の大地』の中で、一人の難民少年とアメリカ青年ピーターの話⁽³⁾を綴
られた。すべての家族とも生き別れて零線上をさま迷った難民少年が、その経験した衝撃によ
って生きる希望を全く失いどんな医者からもさじを投げられた時、ピーター青年の数日にわ
たる寝ずの温かい抱擁によって生命力を取りもどした、という話である。この少年は、肉体的
消耗にも増して精神的絶望状態から生命力を失った。そして不可抗的にあらゆる身体的な生
きる手だてを拒否した。しかしその一度拒否した人生を再受容させたのは、青年ピーターの
愛情によって少年自身の心の中に生きようとする創造的生命力が湧いてきたときであった。

今の日本の社会生活の中に見られる登校拒否や自殺等は、これと同じような人生の創造力
の喪失と言えるのではないであろうか。そして豊かな物質的創造と生産の陰に苦しむこれら
の現実的状况に対して、我々はどれだけ根本的な対策を施したと言えるであろうか。人生の
創造力を目覚めさせ促す努力こそ、今の日本人の為に緊急に必要なことと思われる。技術が
高度化し物が豊かに生産された現在、這うロボットもできた。しかし這うロボットと這う人
間の根本的な違いは、這っている幼児はいつか自分で自分の内側からの力によって立ち上が

るが、ロボットは誰かが動かさない限りいつまでも這っている。

すなわち人間には自ら歩む力があるから、人生は人に押されて歩むべきものではなく自分で築き上げてゆくものであり、人間はそこにこそ人間としての創造力をいかさなければならぬのではないであろうか。自分で自由に考えて実行する、そして繰り返し努力するところに創造性を生かす場がある。幼児は立ち上がるまで苦勞する。立ち上がっては尻餅をつくことを繰り返し、そして遂に立ち上がる。(この繰り返しの中で幼児は幼児なりに多くのことをまなんでいる。)この「立ち上がる」こと、これは内から湧き出る力によって実現する。ロボットにはない生きる力が人生の歩みを創造する。「ここまでおいで……」という母の手の中に飛び込みたい一心で歩む幼児は、こうしてみずからの力で人生の歩みをたどりはじめる。

人生は切り開いてゆくもので「人の前に道はない、人の後に道ができるのだ。」歩いたことのない子が初めて歩く。こうして道を作りながら生きてゆく為には創造力が必要とされる。難しさのない人生はない。その難しさ乗り越え豊かな人生を築いて行く為には豊かなたくましい創造力が必要とされる。創造するとは人間の全能力を尽くすことである。創造的に生きるとは人から押されるまゝに自らの力によって自ら歩むことである。全能力を駆使して創造的に生きて行く時、そこに人生の充実がある。マルセルも言ったとおり創造のあるところに自由があり希望がある。⁽⁴⁾そこには振り回されて歩む人間ではなく、自ら歩む人の姿が有るのである。

3. 創造と秩序

自らの道を自ら歩むところに人間の素晴らしさがある。自ら自覚し、決断し、選択し、目標に向かって生きて行く姿には人間の尊厳が現われている。そうして人間の創造力は現代の高度な科学技術社会を築きあげた。しかし今やこの高度な科学技術は、人間の能力の支配から離れてそれをコントロールする者なくひとり歩き始めようとしている。⁽⁵⁾思想も思考力もない人間の手にこの高度な科学技術が渡される時、そこには技術を支配する人間ではなく技術に支配される人間があるのみである。

ある学者はこの世界の状況を、コンピューターの故障で方向付けを見失った超高速機にたとえた。⁽⁶⁾世界という高速機は非常な高度をものすごいスピードで走っている。しかしそれを支配する筈の人間はそれを正しく操ることを知らない。世界は、ひとつ下手をすればすべては終わるといふに等しい非常な危険にさらされている。世界戦争どころか宇宙戦争さえも引き起こし兼ねない危険をはらんでいる現代、どの方向に向かって人類は超スピードで走って行こうとしているのか、再度その方向付けを見つめて舵の手をしっかりと握り直す必要があるのではないであろうか。戦争のことに限らず、生命科学のことにしてもコンピュータのことにしても、人類にはその幸せのために解決しなければならない多くの課題が残されている。個々の歩みが世界の人類の歩みを決めるとすれば、社会の中の小さな出来ごとでも見逃

しにはできない大切な意味を持っているのである。

日常卑近の社会状況に目を向けてみると、残念ながら人生の歩みの方向付けの喪失の実例を探すのに事欠かない。1983年2月のある日、横浜市の中学生のグループが町中の公園に野宿する浮浪者を襲撃し殺害するという事件を引き起こした⁽⁷⁾。これは彼等に言わせれば、汚れた町をきれいにする為に一掃するのだと言う。しかしその善い目標も、実現する為には人として踏むべき秩序と方向付けがあることに気付かなかった。また別の例として、ひとりの小学生が校庭の隅に植樹されたばかりの一本の木を力試しに引き抜いた。思い切り力を出して木がすぼっと抜けた時、丁度顔見知りの近所のおばさんが通りかかり、それをたしなめるどころか「力があるわねえ」とほめていった。子供の思考と行動の方向付けを迷わせるという面において、この大人の一言がこの子供の生涯に及ぼす影響と責任の重大性を思うとき、肌寒さを感じさせられる事柄である。

上記のようなケースは創造性とは程遠く、むしろ人生と人間社会の破壊的歩みと言える。すなわち人間社会にあるべき秩序と方向性の喪失は創造性の喪失につながるものであり、真の創造性は秩序の中に実現されなければならない。その秩序とは万物の創造主なる神の創造の意図に従うことである。何故なら人間の創造は第二の創造、すなわち神の創造の業への参与に過ぎないからである。その秩序は人間の存在そのものの中に記された、言わば人間にとっての実存的秩序である。そして人間の諸能力は、創造力も含めて、この実存的秩序に沿って用いられなければならないのである。

実存的秩序とは存在そのものが示すもの、即ち被造性の現実からくるものである。人間が正しく真に人間らしく生きて行きたいと思うなら、この被造性の現実を受け入れることが肝要である。例えば魚は水の中で泳ぐもので陸に上ることは魚にとっては破滅となる。もし魚らしく生きてゆきたいなら水の中に住むこと、これが造られたものとしての魚の、望む望まぬに拘らず受け入れなければならない秩序である。造られたものの実存の内に刻印されている創造主の意図の中にこそあらゆる秩序の原理がある。

天地万物は造られた。そこには創造主による神秘的な秩序がある。それが人間の浅はかな知恵になる現代の高度科学技術によって乱されるとき、人間は破滅への危険な道を自ら歩むことになる⁽⁸⁾。例えば樹木の伐採による地球上の自然破壊、核実験による自然現象への影響、生命科学の遺伝子操作などによる自然の摂理への介入などは、人類自らの手で人類の継続的生存を危くしているのではないであろうか。人間は、創造主が人間の為に意図された物質的精神的秩序を、その実存的在り方の内にじっくりと見つめ直す必要がある。それがしっかりと出来た時に、あの浮浪者を襲撃した中学生の善意の方向付けが、またはあの大人の子供に対する一言が、如何に人間の実存的秩序から外れているかが明らかになってくるであろう。

『日本国勢図絵』の統計によると、社会の変化に伴って犯罪の質も変わってきているとい⁽⁹⁾う。犯罪の悪質化・巧妙化(例・森永グリコ事件)がそれである。人間に付与された優れた能力が、実存的秩序からはずれて生かされる時、それは人間をまたその社会を破壊に導く悪質な犯罪となるのである。

4. 人生と創造的歩み

毎日の人生の歩みは、被造性の現実からくる実存的秩序に沿って実現されなければならないのであるが、人間みな同じに生きていても、創造的に生きる人とそうでない人とがある。たとえば川の流れてただ流される人と川の流れの上を泳ぐ人との違いがそれである。

流される人には自由も主体性もなく只流されるままだが、水の上を泳ぐ人間には自由や主体性を含む創造性がある。目的、方向付けがあり、そしてただ流されるのではなく、流れの上であって時には流れを利用し流れに乗り、時には流れに逆らって進む。人生を創造的に歩むとは単に受身で生きるのではなく、人生の川の流れて、乗るにしても逆らうにしても能動的で、常に何か新しい物事を物質的または精神的に生み出しながら歩むことこれである。そのように創造的に生きる時、その人の歩むところそこには常に豊かな実りと収穫がある。

唯人生の波に振り回されるのではなく創造的な生きかたをすること、こうした生き方は人間にしかできないことで、ここに人格の尊厳がある。そして日本人はこれまで多くの場合、物質的な面での創造には力を入れて来たが、精神的な面での創造的な生き方については殆ど忘れていたかまたは気がついていなかった。ここに現代の、物質的には豊かで科学的技術的には高度な日本社会にアンバランスな精神的貧困をもたらした大きな原因がある。人生の方向付けを、すなわち人格の尊厳を見失った超高速機が出現したのである。

度々人生の難しさに出会うとそれから逃避しようとする人がある。それは人格の尊厳の放棄であり、そこには創造性はない。内にこもってノイローゼ気味になる人、お酒を飲んで忘れようとする人、遊びに気を紛らせてしまおうとする人などである。しかしそこには創造もなければ当然生き甲斐もない。辛さ難しさに向かって立ち上がるところ、そこに人生の創造がある。幼児でも立ち上がって歩む為には何回も転ぶ。そして遂に新しい一步を創造する。ましてや人生の道を切り開いてゆくには失敗の繰り返しは当然で、立ち上がる為にはかなりの決断力と勇気を要する。

以上のようなことを念頭において聖書をよんでゆくと、キリストの教えが如何に私達に、日常生活の中での創造的な生き方を示唆しているかがわかる。

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架をになって、私に従いなさい。

自分の命を救おうと望む者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、それを得る。」

(マタイ16, 24)

「わたし」とは最高の王であり、救い主・慰め主であるイエス・キリストであるが、同時に十字架に向かって歩まれるイエスでもある。このイエスに従う道はただ一つで、それはやはり十字架を負った歩みである。この個所は、イエスが繰り返し強調した、弟子達への中心的教訓でありチャレンジであり、また後に続く人々への招きでもある。「自分を捨て」は自己中心をやめて神中心に生きることであり、自分の心の王座にあるべき方は神のみであるこ

と、すなわち創造の秩序が示されている。「十字架をになって」は自我への死を意味している。秩序に沿った人生の創造的実現の為には小さな自我による我が侘は妨げとなる。「捨て」「担って」は不定過去形で、ある時点における明確な決断による体験を表わすもので、単なる受身ではありえない相当の能動的歩みの一步を表現している。そして「従え」は現在形で、それが一生の継続的な営みであることを言っている。⁽¹¹⁾

「あなたがたは、人からしてもらいたいことを、人にもしなさい。」(ルカ 6, 31)

「あなたがたの敵を愛しなさい。人に善を行ないなさい。また、何も当てにしないで貸してやりなさい。」(ルカ 6, 35)

「あなたがたの父が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となりなさい。」(ルカ 6, 36)

その他キリストの多くの教訓は実存的秩序に基づいた創造的人生の歩みへの招きであり、キリスト者にとっての毎日は絶えざるキリストとの応答の生活であって、具体的な生活の中のひとつひとつについてその都度キリストはこの言葉でひとりひとりを招いているのである。それにどう応えるかは各人の自由であるから、人はかなりの創造的選択を絶えず迫られているといえる。

時には人は選択と決断を誤ることもある。しかしこの人生の失敗を受け入れるところにも、新しい人生の再出発と言う大切な創造的意味があることを忘れてはならない。何故かという、人生の失敗には或る意味でやりなおしがきく。このやり直しこそ実存的秩序の再確認であり、神の意図するところに立ち戻る回心⁽¹²⁾を意味しており、ここにも素晴らしい人生の創造があるからである。「大悪人から大聖人が生まれる」ともいうとおり、そして歴史がそれを証明するとおり、失敗は人生の終わりではなく、真の人生の始まりともいうべき創造的跳躍台となりうるのである。

人生は築き上げてゆくもの、世界の平和も人間が造り上げて行くもので、戦争や犯罪の失敗を乗り越えて、世界の未来は人間の自由と創造性に委ねられているのである。

ここで一つ忘れてはならないことは、神の創造と歩みは冷たい機械的な業ではなく、憐れみと慈しみに満ちた業であるということである。そして人間の創造的歩みは、この神の業に参与するものでなければならない。「迷える羊」の譬え話(マタイ18, 10-14)の個所でキリストが

「このようにこれらの小さな者が一人でも滅びることは、天におられるあなたたちの父のみ旨ではない。」

と語っているように、どのように小さな存在をも切り捨てることのない共存共栄の世界を築き上げてゆくことこそ、我々人類の創造性に委ねられている事業なのである。

5. 創造的歩みを促すもの—美と感動—

人生の道程は長く険しい。その中で絶えず創造主の意図と招きに完璧に應えてゆくこと

は、弱い被造物にとっては殆ど不可能なことである。時にはよろめき疲れ果て、立ち上がる勇氣もない。

そのような中で我々に神の創造の意図に沿って歩むよう力づけてくれるもの、それは感動であり感嘆である。ガブリエル・マルセルは次のように言った。

「私には感嘆する力を欠くことは最大の不幸に思えるのです。私はつねに感嘆は創造に接するものであり、あたかもありがたい恵みのようなもので、それによって何か眼に見える創作を行なう天分に恵まれていないものでも、何とかして創造的な精神の次元に達することができるのであります。……あらゆる創造は実際には受けた呼びかけにたいする応答であるということです。⁽¹³⁾」

現代人に欠けているもの、それは、この感嘆に目覚まされた創造へと躍動する自由な力強さではないであろうか。純粹で高尚な精神的感動は、深ければ深いほど日常生活の中で我々の心を汚れから洗い清め、揺り動かし、さらには新しい人生への一步を踏み出させる原動力とさえなっていく。そしてその為に果たす美の役割は大きい。何故なら、美は本性的に人々の中に眠っている創造力をかきたてる力を持っているからである。

現代の物質文明の繁栄の蔭に何か荒んだ印象を受ける日本人の心にも、美を望む想いは尽きてはいない。美しさのあるところに人は群がり感嘆の声があがる。それはあたかも、息が詰まった感じのする現代社会の一隅に清風を見出した喜びに似ている。自然美・芸術美・技術美・人格美などのいずれにしてもそうである。

かつて新聞に載った出来ごとであるが、一人の非番の消防士が、めまいを起こしてホームから線路上に転落した一女性を、間一髪之差で危く滑り込んで来た電車の車輪の災難から救出した。自分の命の危険をかけてのこの快挙は、勇氣ある美しい一幕としてマスコミを通じて伝えられ、多くの人々の心にさわやかな感動と喜びをもたらした。

これは行為美のほんの一例であるが、我々人間は、特に日本人は、歴史的に振り返ってみても美を愛し、人生のあらゆる場面あらゆる物事や行為の中に美を追求してきたといえるのではないであろうか。人の見事な死を散り際の美しい桜にたとえ（花と散る）、お茶の一杯にもその心の美を求め（わび・さび）、死に際にも美しく形整った切腹の作法を尊んだ日本人、生死をかけた戦いの最中にも武士の心を重んじ、日頃の立居振舞にも形の美しい礼儀作法を大切にされた日本人。これらをも、日本人が如何に人の心の美しさと形の美しさのかかわりを重んじ、また心の美しさからにじみ出る行為の美しさを大切にしてきたかが察せられる。

最近、かしこまった形の美は若者等の間にあまり通用しないとはいえ、やはり何らか別の形で美が追求されているようである。たとえば、いわゆる“^{かつこ}恰好よさ”などは、彼等にとっての美の追求であり、彼等はそこに何かしら彼等の心にふれる美しさを感じて感動しているのである。弱者をかばうために勇氣ある態度を示した男の子を見て「かっこいい」と言い、またある変わった服装の人を見て「かっこいい」と言う。一昔も前の我々にとっては変わった服装であっても、現代の若者にとっては何か心に触れるものがあるのである。

しかし美は、目を驚かせ耳を楽しませるような感覚的分野に拘泥すればするほど、次第にその本質が見失われてゆくようだ。近代における美の喪失の道程について、利光教授は『美学講座』⁽¹⁴⁾の中で次のように記している。

「19世紀後半から芸術活動の目覚ましい進展によってあらゆる芸術形式が作り出されてきたが、これは私たちの観点からすれば美の細分化、差異化が際限もなく進行し、その結果、美が見失われてしまう道程と捉えられる。おそらく現代におけるほど人々が多種多様の芸術品に取り囲まれている時代はないのであって、いわばこの美の氾濫^{はんらん}のなかでかえって私たちは美が何なのか分からなくなってしまったのである。現代人は美を感じているのかも知れないが、それが観念として不分明なため美について語らなくなったのである。」

結局、何かしら美の求め方がその本道からはずれてゆくとき人は美について語る言葉を失う、それが現代日本社会の中に起こっている現象のようである。しかしむしろ美の本質は、感覚的なものを媒介としながらも、人の感動を誘って、人をより高度な創造的歩みへと導くところにあるのではないであろうか。かの有名な話であるが、宇宙飛行士達が初めて宇宙空間から地球を眺めた時、如何に地球が美しかったかを、深い感動をもって語っている⁽¹⁵⁾。そしてその美の体験は、彼等の多くを神の存在の認識と関わる神秘的体験へと導いた。利光教授はこれについて「すでに私たちは神を信じなくなった時に、美の喪失が始まったことをみてきた。してみれば美の体験は超越者へ向かうエクスタシスとして、プラトンのいう秘儀的体験であり続けているのではないだろうか。」⁽¹⁶⁾と述べている。

言い換えてみるならば、美は我々にとって超越への招きであり、そこに揺り起こされる感動がより深ければ深いほど、我々をより高い超越へと導いてくれる。我々の日常生活におけるこの美よりの感動は、心の汚れからの清めであり、感覚界から精神界への飛躍であり、ひいては、神との出会いと一致へと導く力をさえ持つものでもある。

感動、それは人があまりにも美しいものまたは素晴らしいものの前にでる時、心を奪われることによって体験する。素晴らしい景色、美しい人と出会った時、ハッとした驚きでじっと立ち止まる人、優れた絵画の前にいつまでもじっと佇み身動きもせずに絵をみつめている人など、そこに見られるのは感嘆のあまりに心を奪われて恍惚^{こうこつ}とした人の姿である。心を奪われるとき人は時間の経過を忘れる。

今道教授が『美について』⁽¹⁷⁾の中で「美を意識するということは、それが大きければ大きいほど、日常的な意識構造の中断であり、日常の歩みを止めることである」といわれたのがこれで、この状態の中にある人はその意識から“時”を喪失する。美の意識があまりにも強いのでその感動が人の心を占め、時の意識を追い遣ってしまった状態である。そのような時、人は時の経過にも周囲の状況の変化にも気がつかない。ただ己が相対しているその対象の美しさに心を奪われ満たされて、全心身の注意をそのものに集中している。これが人が感動の極地に達した時の状態である。そしてこのような深い感動は、人間がさらに純粋な美に触れれば触れる程高まってゆく。霊的生活において人が祈りの中に神の真理の深奥に触れたときに体験するのがそれである。その時にその人は、内的に触れた真理の素晴らしさに感動のあ

まり心を打たれ、奪われ、自己忘却の境地に至る。何故なら最高の真理は最高の美につながるからである。

6. 終わりに—感動から創造へ—

『新約聖書』の中に、使徒聖パウロによる彼自身の一つの神秘的体験が記述されている⁽¹⁸⁾。そこにはある崇高なるものに心を奪われた彼の姿を垣間見ることができる。

「わたしは、キリストと一致していた人のことを知っています。この人は、十四年前——体ごとであったか、体を離れてのことであったかわかりません。神がご存じです——『第三の天』まで連れて行かれました。そして、この人が——体ごとであったか、体を離れてのことであったかわかりません。神がご存じです——樂園にまで連れて行かれ、口にするのも畏れおおい言葉、人間には語る事が許されていない言葉を聞いたのを、わたしは知っています。」

ここに、ある「途方もなくすばらしい」偉大な真理にふれた時の彼の感動と、それによる地上的な一切の事柄についての意識の喪失の状況が伺われる。しかも大切なことは、感動が単に感動に留まらなかったことである。感動に揺り動かされた心は、それを原動力として新しい人生への一步を踏み出して行く。彼のキリストへの信頼と霊的な一致のきずなはより深く堅いものとなり、それは彼をして更に苦難の道へと献身させるのである。

「ですから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んでわたしは自分の弱さを誇ることにします。それで、弱さがあっても、虐待されても、災難に遭っても、迫害や行きづまりに出会っても、わたしはキリストのためならそれでいいと思っています。わたしは、弱っているときこそ、強いからです。」⁽²⁰⁾

彼が味わった霊的な深い感動は弱い彼を変革させ、今後押し寄せる筈の数々の新しい苦難に立ち向かい得る強い彼を創り上げていたのである。その時の彼にはもはや、自分の人間としての弱さを充分に自覚しながらも、同時に、キリストにおいて自分の中に働く神の力の充滿の意識に欠けるところがなかったのである。

「実に、わたしたちはキリストに一致した者として無力ですが、あなたがたに対しては神の力によってキリストとともに生きるのです。」⁽²¹⁾

「生きているのは、もはやわたしではなく、キリストこそわたしのうちに生きておられるのです。」⁽²²⁾

我々の日常生活に立ち戻って考えてみると、ごくささやかな体験ではあるが、困っているときに救われた感激と感謝は自分も他人にそうしてあげたいと自分を促す。または他の人の立派な行為を見た時、その感動は自分を同じような行為へと内的に励ます。前に述べたピーター青年に救われた難民少年は、その後多くの難民の為に奉仕する立派な司祭に成長したということである。結局、感動は人生の創造を生むが、その創造は単に受け身で押し流される生き方をしている者の姿勢ではあり得ない。むしろ人を内部から動かすもの、それが感動

であり、その感動は表面的な感性のものではなく、悟性による物事の深みにある意味に対する感動である。そしてこれこそ人を真の人生の創造へと促すものなのである。

人がキリストの十字架像に感動するのはそれが見ている感覚的に快いからではなく、その聖なる意味に心の眼が開いた時の感動で、その悟りは、同時にその人に対する聖なる人生への招きでもある。こうして人は意味の深さを悟れば悟るほど深い感動を受け、その感動が深ければ深い程より高い人生へと揺り動かされてゆくのである。

現代の日本人に欠けているもの、そして今人間社会を精神的により豊かにする力となり得るもの、それは豊かな創造力をもたらし得る聖なる感動であり、その聖なる感動の中にじっくりと身と心をひたらせるゆとりである。現代の日本社会における人間性の回復と向上は、そして心の豊かさへの努力は、そこからはじめられてよいのではないであろうか。

[注]

- (1) 下中邦彦編『哲学事典』(平凡社, 1982) p. 859-p. 860参照。
- (2) 文部省「昭和61年度の児童生徒の問題行動の実態調査」(1987. 9. 11) 参照。
ゲオルグ・ズイークムント(中村友太郎訳)『生か死か・自殺の問題』(エンデルレ, 昭50)の「15 世界的問題としての自殺」(p. 215-p. 226) 参照。
- (3) 犬飼道子『人間の大地』(中央公論, 昭59)の「ゼロと一」(p. 83-p. 99) 参照。
- (4) 『マルセル著作集 8, 人間の尊厳』(春秋社, 1973)のp. 204に「どんなつまらない水準においても、創造があるかぎり、何らかの自由があるということであります。」、また p. 191に「もっとも自由な人間とは、希望するところのもっとも多い人である…」と述べている。
- (5) 第二バチカン公会議『現代世界憲章』(中央出版社, 昭42)の4参照。「今日、人類史の新しい時代が始まっており、深刻急激な変革がしだいに全世界に広まりつつある。人間の知識と創造的努力の挑発によって生じたこれらの変革は、人間自身の上に、また個人および団体の判断と欲望の上に、人と物についての考え方と態度の上にはね返ってくる。……あらゆる発展の危機に際して生じるように、この変質には重大な困難が伴う。たとえば、人間はその力を大きく広げてゆくが、それを人間の役にたたせるようにすることがいつでもできるわけではない。人間精神の深層にまで深くはいっていきように努力するが、自分自身については、しばしばいっそう確信を持ってなくなっているように見える。社会生活の法則をじょじょにもっと明確に発見していくが、社会生活の方向づけについて迷っている。」
- (6) J. マンア『いのちと家庭』(上智大学, 昭61)の「生命操作時代の家庭の使命」のp. 9-p. 10参照。
- (7) 『日本国勢図会』(国勢社, 1987) p. 517参照。
- (8) カール・ラーナー(百瀬文晃訳)『キリスト教とは何か・現代カトリック神学基礎論』(エンデルレ, 昭56) p. 105参照。「被造性とは、つねに恵みであると同時に命令でもある。すなわちわれわれは、有限的主体のあり方そのものである類比による不安定なあり方を真摯にとらえ、受諾するように命ぜられているのである。自分が真実に実在的存在であり、責任を課された存在であると同時に、まさにそのようなものとしてこそ、端的に絶対的神秘に由来し、また絶対的神秘を未来として志向する存在であると考え、そのように自分を理解し、受け取るよう命ぜられているのである。」
清水宏子「道徳教育と人格の尊厳」(『人間学紀要第14号』上智大学人間学会, 1984)の“Ⅱ「人」と「道徳」”(p. 88-p. 90) 参照。

清水宏子「道徳教育と人格の尊厳」(『清泉女学院短期大学研究紀要 第4号』1986)の“IVキリスト教的道徳と自由なる応答性として責任”(p.14-p.17)参照。

- (9) 犬飼道子『人間の大地』(中央公論, 昭59)の「大地, 逝くか」(p.189-p.205)参照。
- (10) 『日本国勢図会』(国勢社, 1987) p.548参照。
- (11) 『新聖書注解・新約1』(いのちのことば社, 1979)のp.143参照。
- (12) 回心(ギ: metanoia: 悔い改め)とは単なる外面的な生活の改善ではなく、精神の根本的变化を意味し、人間の弱さから悪におちいった者が神の恩恵の助けによって、真心から真実に神に立ち帰ることを意味している。
- (13) 『マルセル著作集8, 人間の尊厳』(春秋社, 1973)の「第七講 人間の尊厳」中のp.170-p.171参照。
- (14) 今道友信編『美学講座 2 一美学の主題一』(東京大学出版会 1984)中の「2 美」のp.76-p.77参照。
- (15) 同上 p.78参照。
- (16) 同上 p.78参照。
- (17) 今道友信『美について』(講談社, 1973)のp.191参照。
- (18) 『新約聖書』Ⅱコリント, 12, 2-4参照。
- (19) 同上 Ⅱコリント, 12, 7参照。
- (20) 同上 Ⅱコリント, 12, 9-10参照。
- (21) 同上 Ⅱコリント, 13, 4参照。
- (22) 同上 ガラテア, 2, 20参照。